

私たちを取り巻く“生きづらさ”を解きほぐす
～これまでの社会の“ふつう”を問い直すことから～

府立人研通信

大阪府立学校人権教育研究会

第4号

2024年10月8日発行

地域交流部会にお越しいただき、ありがとうございます。



ようやく朝晩涼しくなってきました。みなさま、いかがお過ごしでしょうか？
府立人研通信第4号では、7月5日（金）、12日（金）に開催された地域交流部会の報告をさせていただきます。
当日お越しいただいたみなさま、これをお読みになっているあなた、ありがとうございます。



地域交流部会

今年度は、7月5日（金）に大阪市内北・南（合同）、北河内、南河内、7月12日（金）に豊能・三島（合同）、中河内、泉北・泉南（合同）の6つのブロックで地域交流部会を開催しました。

豊能・三島（旧1・2学区）

インクルーシブな地域連携へ
～高校生がつくるふれあい冬まつり～

日時：7月12日 14:00～17:00

場所：府立槻の木高等学校 会議室



「インクルーシブな地域連携へ」というテーマで、実践報告が行われた。

高槻市内の学校と地域の方々が協力して、毎年1月に障がい者福祉センターで「高校生がつくるふれあい冬まつり」が開催されている。

府立高槻支援学校からは、生徒が冬まつりで高校生や地域の人たちと交流することで成長する様子を話していただいた。活動の中で、お互いが助け合いながら成長する姿から地域連携の重要性について見直すことができた。

また、高槻市腎友会の講演では、冬まつりを通じた繋がりが、互いに頼りあい、学びあえる関係を育む土壌となっており、特に報告者が活動を心から楽しんでいる様子がとても印象的だった。それが周囲に、そして地域の人々に広がっていくことで、地域の活動の活性化に繋がるのである。

府立阿武野高等学校からは、高槻冬まつりの中で成長していく生徒たちの姿に喜びを感じる一方で、冬まつりを支えてきた教職員が次々と退職していき、その取り組みを続けていく難しさを感じているという報告があった。20年以上続くこの地域連携の取り組みが終わってしまわないためにも、どのように取り組みを継承し続けていくのかという課題にも向き合っていかなければならない。

箕面市立第二中学校の報告では、学校と行政、地域が協力し、「反差別」「社会への参画」に向けた活動についてお話いただいた。特に、生徒が主体となって社会問題に向き合い実現した「喫茶 in 二中」の事例が印象的であった。「様々な事情で朝ご飯を食べていない人がいる。学校で楽しく朝ご飯を食べる機会をつくってみたい。」という問題意識から始まったこの活動は、地域の方々や企業を巻き込み実現することができたとのことであった。

報告いただいた活動は、どれも地域の人々が仲間という意識を持ちお互い助け合っていた。このように、地域に生まれる絆が社会的包摂の実現に繋がるモデルとなることを学んだ。



大阪市内北・南（旧3・6学区）

ささやかな出会いの日 ～地域で「人」を支える～

日時：7月5日 14:00～17:00

場所：北御堂（本願寺津村別院）

2階 津村ホール



お香の香りに包まれた会場で、本願寺津村別院輪番の光岡理學さんよりご挨拶をいただいた。北御堂と大阪城の関係、1945年の大阪大空襲での伽

藍の焼失、1964年の再建、「御堂筋」の由来、北御堂は大阪のまちづくりに大きく関わっており、1階にある北御堂ミュージアムには、大阪の歴史を知る貴重な資料の数々が収められているとのことがあった。

その後、次のように多くの報告があった。

◆府立大手前高等学校 定時制の課程

「防災と人権、地域防災を考える」

◆（同校）大阪城の見える図書室より書籍案内

「今読むとヤングケアラーの本」

「発達障がい当事者の本」「生理の本」

「大手前高校定時制がモデルの本」

◆特定非営利法人ふうせんの会 佐治朋子さん

「ヤングケアラー支援について」

◆星湖舎・施設図書館「闘病記の森」代表 金井一弘さん

「この町で闘病記を集める理由、そして今日という日」

◆府立西成高等学校「西成高校の地域連携」

◆夜間中学校卒業生

「学ぶことは、生きること ー日本の学校で私はー」朗読動画



地域で様々な活動を行っている方の情報や活動を知ることができ、大変有意義な時間であった。地域との連携を図る上で、この会は必要不可欠であると思う。これからも学校と地域の橋渡しとして、また、人権教育をたくさんの方に知って頂けるよう続けていきたい。地域とのつながりという視点から、様々なお話をきくことができ、いい機会に繋がった等多くの感想があった。

参加者は、府立学校（中学校、高等学校〈全日制・定時制〉、支援学校）、小学校、中学校、大学、行政、宗教関係者、就労支援施設、社会福祉協議会、行政

書士事務所、芸能事務所、ボランティア、元府立学校教職員等々、校種職種を超えた貴重な交流の場となり、多くの学校案内、団体紹介等の資料を提供していただいた。

今後も、この「ささやかな出会いの日」を望む声が多く寄せられた。

北河内（旧4学区）
誰ひとり取り残さない学びのセーフティネット
夜間中学校と定時制高校

日時：7月5日 14:00～17:00
場所：府立芦間高等学校 大会議室

北河内地域では、多様な背景のある生徒の学びの保障をしている2つの学校の実践から学ぶ機会となった。1つめは「夜間中学校とその『学び』」と題して、守口市立さつき学園から実践報告をしていただいた。大阪の夜間中学校の起源や時代と共に変化した夜間中学校の意義を、歴史的経緯と合わせて話していただいた。かつては、対象が不就学者であったが、長欠の学齢児童生徒から、学齢超過者へ転換し、「教育を受ける権利」を等しく保障する場としての夜間中学の誕生の経緯が、現在まで続く夜間中学の存在形態と基本理念であると、力強く語られた。生徒数の変化と共に、昨今の生徒層の変化では、外国にルーツのある生徒が増え、その生徒の学びを保障する役割をも果たしている。さつき学園では、学びに対する意欲がある後期高齢者や10を超える国の生徒が在籍し、念願だった学校にたどり着き、困難な状況でも、希望を見出そうとする切実な思いや姿勢が、学校内にあふれている。生徒たちに「今をよりよく生きていこうとするために学びを深めて希望を見出すことこそが、明日への創造につながる」と実感してもらうために、日々いろいろなことに取り組んでいる夜間中学校の実践から学ぶものがたくさんあった講演であった。

2つめは、さつき学園夜間学級の生徒が進学す

る学校の1つである府立寝屋川高等学校定時制の課程から「日本語指導の必要な生徒への支援体制について」と題して実践報告をしていただいた。授業の抽出や入り込み、教育サポーター制度の活用、保護者対応の工夫等、全日制の学校でも想定される課題解決につながる実践の報告がたくさんあった。終盤には、授業の様子を収録した映像を視聴した。自身の思いを発表する外国籍生徒の様子は、どれもが堂々と、そしていきいきとしていた。

最後に報告者からは「母語やルーツに関係なく、全ての生徒たちが『高校卒業資格』+『夢を実現する力』をつけて卒業してほしい」と願って、日々生徒の対応に取り組んでいるエピソードが語られた。

今回の2つの内容はどちらも、多様な背景のある生徒の学びを保障し、未来への希望や夢をあきらめない力を育む実践にあふれていた。



中河内（旧5学区）
定時制高校から学ぶ
多様な背景がある生徒に寄り添うとは

日時：7月12日 14:00～17:00
場所：府立布施高等学校 視聴覚室

中河内地域では「多様な背景がある生徒に寄り添う」を中心テーマにして、2校の取り組みの実践報告があった。前半は、生徒に寄り添いながら

生徒の進路変更に伴って来た府立八尾北高等学校での実践の報告があった。コロナ禍を経て生徒たちのコミュニケーション力が変容し、物事を捉える範囲が狭くなっていること、SNSの普及で対面経験の有無に関わらず誰かといつも繋がった環境に依存する傾向にあること等、生徒たちの課題を学年団で常に共有されていた。アンテナを張り小さな変化を見逃さない感性をもつ大切さ、それは大げさである必要はなく生徒たちに興味や関心を持ち続けることだと語られた。報告で語られた生徒たちの姿は、まさにどこの学校現場にもいるであろう生徒たちばかりで、特別な課題のある生徒ばかりではない。しかし生徒たちの背景は多様で、それらに3年間真剣に向き合い寄り添った実践によって、卒業し次の進路に向かって進めた生徒のエピソードがたくさんあった報告であった。



後半は、府立布施高等学校定時制の課程から報告があった。小・中学校で不登校経験のある生徒、複雑、困難な家庭環境、外国にルーツのある生徒、様々な障がいのある生徒、転編入学の生徒等、生徒のニーズも多様で、最近では中学卒業後すぐの入学が多いという報告もあった。さらに生徒たちの居場所づくりに日々取り組んでいる実践には、生徒の多様な課題を解決するために外部機関との密な連携、放課後活動を卒業生と共にサポートをしている取り組み等があった。全日制の課程の学校にとっても大いに参考となる実践ばかりであった。「生徒のパフォーマンスを発揮させることで、生徒たちは見失いかけた自分を取り戻していくことができる。そうすることで、生徒たちをとりまく負の連鎖を断ち切りたい。」中河内地域

で唯一の定時制高校としての使命を持って、社会連携の輪に加わり、組織的なノウハウを集積しこれからも生徒対応に取り組みたい。「ゆっくり・しっかり、焦らず、卒業時を見据えた指導・支援を継続していきたい。」と報告者は熱く語られた。

多様な背景のある生徒に寄り添い、次の進路にそして定時制高校にバトンが繋がれた実践から学んだ参加者からは、ぜひ今回の報告を参考にし2学期からも生徒対応に取り組みたいという声が寄せられた。

南河内（旧7学区）

みなかわカフェ

～生徒を支える場、人、アイデアと出会う～

日時：7月5日 14:00～17:00

場所：はーとビュー（松原市人権交流センター）
2階 ミニホール



若者の長所や強みに光を当て、学校と伴走しながら生徒の支援に関わってくださっている「地域資源との出会い」をテーマに開催した。まず、生徒の支援に関わって、参加者全体で各現場の様子や課題意識、生徒像等を交流し、認定NPO法人D×Pと認定NPO法人育て上げネットの方から、それぞれの団体で行っている若者支援の取り組みを紹介していただいた。

D×Pからは、ユキサキチャット事業（進路や就職、生活にまつわるオンライン相談）を中心に実際の相談事例も含めてお話いただいた。親を頼れないケースや不登校・引きこもりに関する相談をはじめ、食糧支援や現金給付を希望する声が多く寄せられているという。また、相談業務に携わる中で大切にしていることも併せてお伝えした

だいた。①子どもの世界は子どものもの、②話しやすいおとなでいる、③行動することはできなくても「知っておくこと」はできる、これらは私たち教職員にとっても大切にしていきたい姿勢であると確認することができた。

育て上げネットからは、「働き方の拡張支援」に重きを置いた若者支援に取り組まれているという話があった。困っていても相談にハードルを感じる人が多いことから、まずは就労支援とは別に、若者にとって来所する動機を生み出すことを大切にしているようだ。若者がもともと持っている「好き」「できる」「やりたい」を受け入れ、一緒にやり、応援することで、様々な力やスキルが獲得できるだけでなく、活動することへの自信が付き、新たな「やりたい」が生まれていく。若者の興味関心に徹底的に寄り添うことから社会とのつながりをつくっていく支援のあり方に学ぶことができた。

その後、参加者から出された事例や悩みに対して、自分だったらどのようにアプローチするか、助言をいただいた。学校または教職員として生徒と接する際、いつの間にか「何とかしなければいけない」と思い込みがちになっていたところに、自分一人では気づけない視点に触れることができた地域交流部会だった。



前半は、泉佐野市立佐野中学校夜間学級について、設立に携わった泉佐野市役所の本道さんと夜間学級教頭の武田さんにご講演いただいた。日本の夜間学級の歴史やその必要性をお話いただき、昔と今で通う生徒の様相は変わってきてはいるものの依然として高い需要があることが再確認できた。また、佐野中学校夜間学級のリアルな様子もお伝えいただき、その際の「学んでほしい、けどまずは生き延びる力をつけてほしい」というモットーのもと校外学習に繰り出す話には感銘を受けた。

後半は、府立成美高等学校より外国にルーツのある高校生たちの支援についての報告をいただき、日本語指導や母語保障、多文化倶楽部の様子等さまざまな取り組みを紹介していただいた。とくに母語と日本語、どちらの言語も十分に発達していない状態であるダブルリミテッドや親子で会話が出来ないことを解消するために母語保障が必要という話には深く頷かされた。

時間の都合で交流はできなかったが、教職員がさまざまな学校を知ることは生徒の進路選択に直結することを実感する有意義な時間であった。



泉北・泉南（旧8・9学区）

「いま、なぜ夜間学級なのか？」

学びと進路を保障する公教育をめざして

日時：7月12日 14:00～17:00

場所：泉佐野市立佐野中学校

府立人研 大阪府立学校人権教育研究会

〒533-0024 大阪市東淀川区柴島1-7-106 府立柴島高等学校内

（通送便は「府立人研」とお書きください。）

TEL・FAX 06-6324-3822（直通）（お電話の場合は、火曜日をお願いします）

E-Mail furitsujinken@nifty.com（お問い合わせは、なるべくメールをご利用ください）

URL <http://furitsujinken.in.coccan.jp/>

↓府立人研 HP も
チェックしてくださいね

